

10月23日(金)

学校図書館資源共有ネットワークモデル校実践報告

茨城県つくば市立吾妻中学校 教諭 半田 雅代

はじめに

本校は、つくば市の中心部に位置し、大学や各種研究機関、市立中央図書館などの学習環境に恵まれた学校である。保護者の大半は大学・研究機関に勤務しており、学校教育に対する関心も高い。そのため生徒の学力が高いのはもちろんであるが、運動面でも優れた成績を収めるようになってきている。学校教育目標の「21世紀をたくましく生きる活力ある生徒の育成」の実現に向けて、教員だけでなく生徒たちも文武両道を目指して生き生きとした学校生活を送っている。

読書の習慣も身に付いている生徒が多い。毎朝10分の朝読書の実施、国語の授業での本の紹介活動(帯作り、ブックトーク等)、委員会の生徒の読書集会やおすすめ本紹介等の活動などを通して、読書が生活の一部に位置づけられている生徒が多くなってきている。県の事業の「みんなにすすめたい一冊の本」30冊達成率は1年生21%、2年生81%、3年生75%(8月末)である。

学校図書館共有ネットワーク事業について

1 文科省の「資源共有ネットワーク推進事業」について(資料1)

「子どもの読書活動を推進するための諸条件の整備・充実」のひとつである。その概要は「学校図書館の蔵書のデータベースやネットワークを利用した教育実践の共有化、蔵書の共同利用を推進するとともに、学校図書館関係者の資質の向上を図る研修プログラムを開発する。」とある。

新学習指導要領では「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」とされ、「総合的な学習の時間」においても、その積極的な活用が求められている。そのためには、学校図書館の施設・設備の整備充実だけでなく、図書館への人の配置を含め、よりよい図書活動を実現することが不可欠であるといえる。

つくば市は「平成16年度～18年度学校図書館資源共有ネットワーク」推進地域に指定され、学校図書館を活用した教育活動の充実及び学校を越えた図書の共同利用の促進等を行ってきた。

2 学校図書館活性化ソフト「情報Boxライブラリーサーチ」について(資料2)

このソフトは現在つくば市の全ての小中学校で使われている。このソフトでできることは主に次の6つである。

蔵書の登録(データベース化)	利用者の登録
利用者バーコードの印刷	貸出・返却
督促の手紙や各種統計の印刷	蔵書の検索(学校間連携)

3 ソフト活用の実際（資料3）

<受け入れ> 「蔵書引き当て」は原則として司書教諭及び図書館ボランティア（大学生）がコンピュータで行う。

<貸出・返却> 読書推進委員の生徒が行っている。貸出は生徒個人のバーコードを読み取ってから、図書の本コードを読み取るだけである。返却は図書のバーコードを読み取るだけなので短い時間で多くの生徒の貸出・返却が可能になった。

4 学校間連携（資料4）

つくば市教育委員会指導課HPを開くと「つくばキッズ」というコーナーがある。その中の「図書館ライブラリーサーチ」というページを開くとつくば市内の図書館の全蔵書が検索できる。本校の図書館の蔵書は限られているが、この機能を利用すれば、調べ学習に必要な図書や読書活動に必要な図書がどの学校に何冊あるかがすぐに分かる。手続きをすれば簡単に借りることができ「読書センター」としてまた「学習情報センター」としての学校図書館の役割がさらに充実するのである。

実践 中3国語「おくのほそ道」の授業における図書資料の活用

1 単元名 国語 古典を味わう「おくのほそ道」

2 単元の目標

繰り返し音読したり、暗唱したりすることによって、古典の優れた表現やリズムを読み味わうことができる。

俳句や地の文を手がかりに、芭蕉のものの見方や考え方、感じ方を読み取ることができる。

3 学習計画

第1次 「おくのほそ道」を読んで、芭蕉のものの見方、感じ方を読み取る。

第1時 「奥の細道」の文学的価値や芭蕉について理解する。

第2時 古文を正しく読み、大意をとらえる。

第3時 「出発まで」の部分を読んで「旅」への思いを読み取る。

第4時 「平泉」の部分を読んで、芭蕉の感動を読み取る。

第2次 「奥の細道」の他の部分を読んで鑑賞文をまとめ、読み合う。

4 育てたい力

本単元で育てたい確かな学力は、学ぶ意欲、知識・技能、学び方である。古典を理解する基礎的な能力を育成するために、繰り返し音読したり、暗唱したりする活動を多く取り入れていく。また、地の文を手がかりに俳句を鑑賞し、情景や芭蕉の心情を十分に感じ取らせる学習や「奥の細道」全体を読み、自分の好きな俳句の鑑賞文を書いたり、友達の作品を読み合ったりする発展的な学習を行う。これらの活動を通して、学び方を理解させることはもちろん、主体的に古文に親しむ態度や古典への興味・関心をより一層深めさせていきたい。

5 ICTとの関連

(1) 利用ICT, ソフトウェア

- ・コンピュータ, プロジェクタ, 電子情報ボード, スクリーン
- ・デジタル教科書(光村), スタディノート

(2) 活用のねらい

デジタル教科書の朗読機能を使って味わい深い朗読を聞くことで、生徒は古文が持つ独特の表現やリズムを十分に味わったり、自分の音読や朗読に生かしたりすることができる。また、教科書の口語訳を伏せて提示できるので、古文の表現に即して芭蕉の思いや感動を読み取ることができる。みんなで教科書と同じ画面を見ることは授業への集中力を高め、必要な箇所を拡大することで学習内容を焦点化することも可能である。スタディノートのマップ機能を活用しての鑑賞文作りは「奥の細道」への関心を高め、生涯にわたって古典を親しむ態度につながる。

6 指導の実際

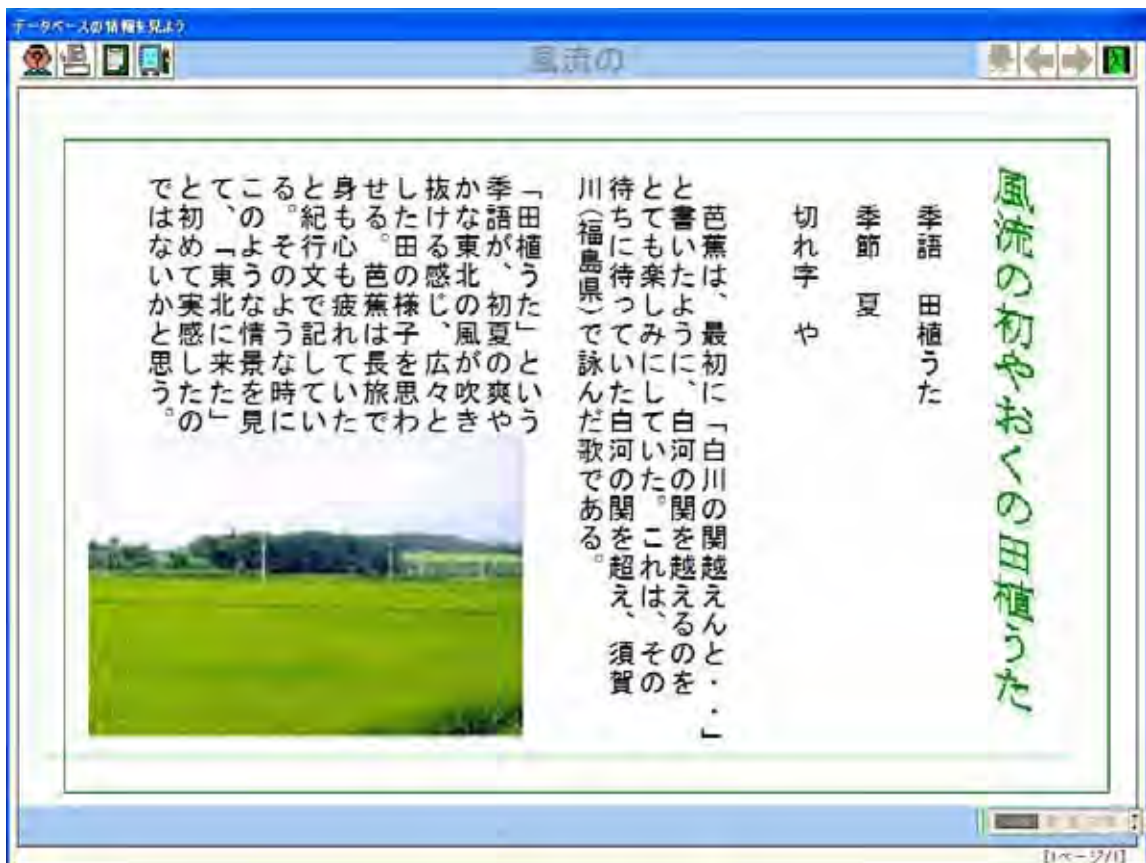
学習計画の第2次「『奥の細道』の教科書以外の部分を読んで鑑賞文をまとめ、読み合う」学習の中で図書資料を活用した。「奥の細道」に関する図書資料は、本校には7冊



あった。7冊では35名が学習するには少なすぎるため、市立図書館からも図書を借りることにした。しかし、市立図書館の図書は、大人向けのものが多く、生徒が学習に利用するには難しいと感じた。そこで、市内の中学校の図書資料を検索し、本校に最も近い竹園東中学校に図書の貸出をお願いした。三カ所から集めた図書は41冊となり、生徒が活用するための準備が整った。

まず、すべての資料に目を通すことができるように、生徒を5～6人のグループに分け、図書を6冊ぐらいずつ回して読むようにした。その際、自分の学習に使えるもの、もう一度読みたい本については図書の名前をノートにメモしておくように助言した。

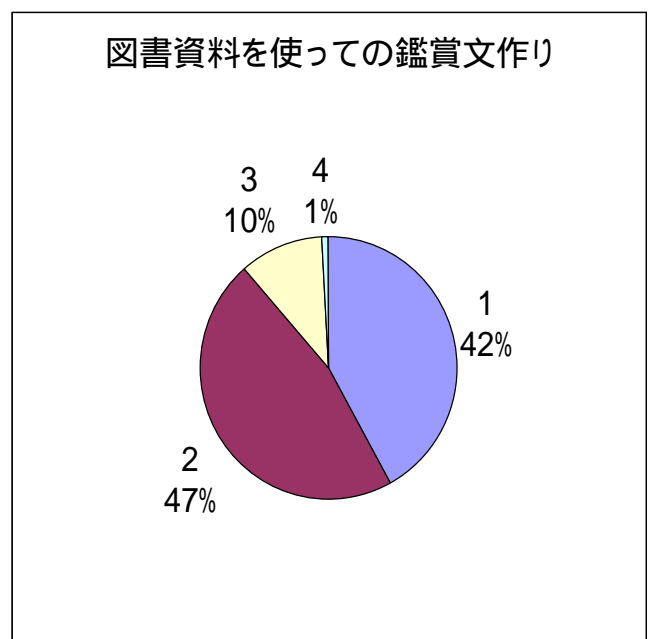




互いの作品を鑑賞し合う活動の際にもデータベース機能を使った。短時間に級友の作品の鑑賞ができ、お互いに感想の交換ができる。感想を送ってもらうことで、もう一度自分の作品を読み直し修正した生徒も多い。データベース化しておくことで学年全体の生徒の作品を見ることができ、クラスの枠を超えた学習ができた。いつでも校内のどこからでも見ることができるも利点である。さらに、今回の3年生の学習の足跡を来年度の3年生の学習に生かすことも期待できる。

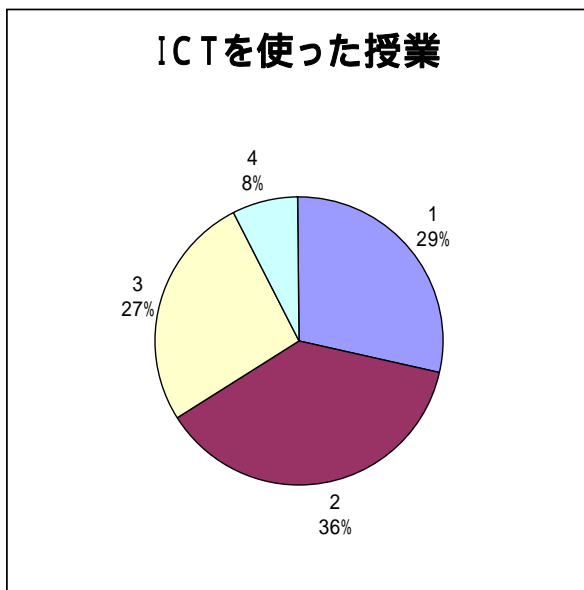
- 7 生徒たちの感想
- 1：よかった
 - 2：まあまあよかった
 - 3：あまりよくない
 - 4：よくない

(1) 図書資料を使つての鑑賞文作りについて
 参考になった本があり、とても助かった。いろいろな資料が見られた。自分が好きな俳句を選べたからやる気が出た。インターネットで調べることが多かったので、図書を使つての学習は新鮮だった。写真や地図、漫画などがあつて情景や心情がよく分かった。



「奥の細道」全体を読めたので理解がさらに深まった。
 本によって解釈が違っておもしろい。
 資料が多すぎて迷った。
 時間が少ない。もっとじっくり読みたい。
 インターネットと併用したい。
 難しい本が多すぎる。
 自分の使いたい本はみんなも使いたいため、一人で十分利用できない。
 同じ本を使うと、鑑賞文が似たものになってしまう。

(2) ICTを使った授業

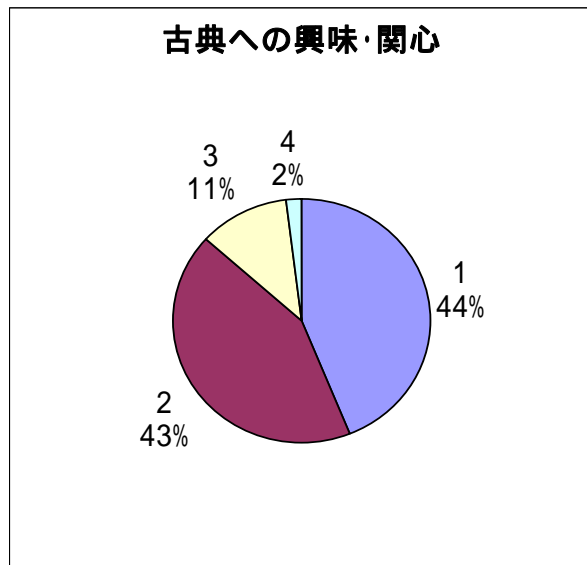


デジタル教科書は画面が大きく、見やすくよかった。
 教科書のどこ文を話題にしているかがよく分かる。
 線を引いたり、書き込みをするのが楽しい。
 資料があって理解が深まる。
 スタディノートを使うまとめが楽しい。
 他のクラスの友達の作品を見たり、感想を書けたりして楽しい。
 みんなの作品が見られるからおもしろいし、理解も深まる。
 デジタル教科書は後ろだと見えにくい。光の加減で見にくくなることもある。

準備に時間がかかるから、ムダな時間が出てしまう。
 普通の授業と変わらない。

(3) 古典への興味・関心の高まり

昔の人の考えや感じ方に共感できる部分が多くあった。
 紀行文の中の俳句は情景や心情がとらえやすかった。
 芭蕉の句をたくさん読むことで少しおもしろいなと思えるようになった。
 堅苦しいイメージから美しいイメージへと変わった。



芭蕉の気持ちや旅について理解できてよかった。もっと読んだり、調べたりしてみたい。

芭蕉の旅した場所に自分も行ってみたいとなったし、芭蕉に負けないくらいの俳句を作りたくなった。

みんなの鑑賞文を読んで、もっと「奥の細道」を読んでみたいとなった。

言葉が難しい。

読みづらい。

8 成果

- ・多くの本の中から自分の好きな俳句を見つけ、紀行文の文章を参考に俳句を鑑賞できる学習は生徒の興味、関心を高め、「奥の細道」や芭蕉への理解も深めることができた。
- ・図書資料は写真、絵(含漫画)、地図等が多く掲載され、生徒の調べ学習に適していた。
- ・ネットワークで他校の図書情報を検索できるので、必要な図書を数多く集めることが可能となり、生徒の学びを広げることができた。

9 課題

- ・図書検索システムには、図書についての具体的な内容が示されておらず、実際に手に取って見ないと生徒に適した資料かどうか分からないところがある。
- ・調べ学習の時間が多くとれないと資料ばかり多くて、じっくり選んだり読んだりできず、効果が得られない。
- ・図書館年間利用計画を作成し、計画的な読書指導、学習指導を行う必要がある。
- ・図書の貸し借りの際、学校間で手軽に図書を移動させることが難しいのが現状である。
- ・つくば市内の小中学校の図書室を全体で一つの図書館として考え、それぞれの学校の図書室が独自の特色を出していくことで、さらに有効な活用ができるようになる。
- ・扱う教材によって同じ図書資料が必要となる可能性があるため、扱う時期をずらしていく必要がある。

終わりに

「司書教諭専任」として勤務しているわけではないので、他の校務分掌に追われる毎日である。しかし、昼休みは「図書コーナー」(吾妻中には図書室がありません)に顔を出し、委員会の生徒の指導や本を読んでいる生徒の観察、書棚の図書の整頓などを行っている。なかなかたいへんだが、図書館教育は「学びの場」としても「人間形成の場」としても学校教育の要となることを信じて、今できることを精一杯やっっていこうと思う。

つくば市内の図書館が資源ネットワーク事業により一つになったので、より生徒のニーズに応えることのできる場となった。図書の貸し借りに際して、学校間での図書の移動方法についてはまだ課題が多いが、生徒たちに読書の魅力を伝え、本を使って学ぶことのおもしろさを教えていきたい。